

## ◆書評◆

堀江未央著

## 『娘たちのいない村』

## 『ヨメ不足の連鎖をめぐる雲南ラフの民族誌』

(京都大学学術出版会 2018年 ISBN:978-4-8140-0143-9 4000円+税)



佐藤 齊華

(帝京大学 文学部・社会学科)

本書は、中国の人口政策が生んだ偏った性比と市場経済化のなかで充進した経済格差を背景とした雲南省ラフ女性の漢民族地域への遠隔地婚出という現象を主題とする民族誌である。ラフ女性たちはいかにして、なぜこの移動をしてきたのか（そしてそれはラフ社会に何をもたらしたか）を問うものであり、焦点は「娘たちのいない村」というより「いなくなった娘たち」であるように見るが、いずれにせよ現代世界のドラマスティックな変態の波頭であり原動力である「移動」に光をあてた、大変時宜を得た着眼である。まずは本書の内容を概観しよう。

調査地で同年輩の女性に出会えない困惑から研究の着想に至る経緯に触れた短い序に続く第1章「女性が流出する社会」は、中国研究・女性移動研究をレビューして本研究の問いを位置づける。四半世紀以上にわたる人類学・社会学的議論、とりわけ女性の移動をめぐる議論でトピックをなしてきたエージェンシー論を検討し、「被害者としての女性」像からの脱却をめざすのに

急で女性の主体性を安易に強調する傾向を批判する。そして、女性と周囲との関係性および周囲の社会が女性の行動（移動）をどう解釈するか（これを著者は「エスノ・エージェンシー論」と呼ぶ）に焦点を当てるとする。第2章「ラフ村落の空間秩序と婚姻慣行」はラフの伝統的秩序への導入、第3章「遠隔地婚出の登場と変遷」は調査村からの遠隔地婚出をより広域の文脈に位置づける概観となる。第4章からがいわば本論で、第4章「遠隔地婚出をめぐる村人たちの語り」は女性の遠隔地婚出を引き起こす原因やその責任が村人たちによってどう語られるかを追究するエスノ・エージェンシー論の実践である。1980年代後半以降、90年代後半以降、2008年以降の三期に分けて遠隔地婚出（についての語り）の変遷を辿り、移動をめぐる諸アクターの語り、誰が誰にどんな場で語られるかにより一つに収斂することなく多声的に投げ出され、また後の事態の推移によっても可変的であることを示す。関係性のなかで再解釈にさらされていく女性の移動の原因と責任

は、必然的に曖昧さを帯び、特に近年村人たち自身にとっても「女性の主体性はさらによくわからないもの」となっているという（193頁）。第5章「逡巡するラフ女性たち」は、遠隔地婚出をした女性たちを婚出先に訪ねて聞き取った語りをもとに、少なからぬ女性たちが村に戻るかどうか逡巡している現状を示す。第6章「女性の属する家はどこか」は、遠隔地婚出によって安全な「居場所」を失うリスクにさらされる女性とその家族が、移動とともに居場所を失ってしまわないように、漢族／ラフの夫方と国家的身分証明（「戸籍」、「結婚証」）をめぐる交渉するさまを描く。第7章は結論となる。

さて、民族誌のなすべき最も重要なこと（の一つ）は、「他者」の生を描いてこれを「私たち」に可能な限り「わかる」存在とすることだろう。本書の叙述を通じて浮かび上がるラフ女性像とは、どんなものだったか。

ラフ社会の女性について本書のそここで強調されていたのは、その「高い地位」である。「ラフにおいては男女間の差異が強調されることはほとんどない。ふるまいについての制限が男女どちらかに強く課せられたり、男女の片方がもう一方に対して劣位であると言われることはなく、男女は基本的に対等である。女性が男性より意志薄弱であったり、行為の責任能力に欠けていると見なされることもない」といった具合である（188頁）。それとともに描かれるのは、娘たちが婚前に（性交渉を含む）「恋愛」を楽しむ自由を享受していること、都会的・消費主義的な生活に憧れていること

（「農業だけしている暮らしはいや」、「ヒールをはいてコツコツ歩」きたい等）である（後者は漢族男性との結婚の背景でもある）。

他方で、どこかでそうと著者が言明しているわけではないのだが、諸事例の叙述全体から立ち上がってくる、一つの否定し難い印象がある——彼女たちの行動がどうも「突然」だということである。極めて重大な結果を招く行動の決断（出奔、結婚、離婚から、はては自殺（事例1）まで）が、余人には理解し難い直情的なかたちでなされているように見える。うら若い彼女たちでも当然培ってきただろうラフ的習慣、規範意識から情愛、社会関係までをいきなり投げ出すかのような行動に見えるのである。その一方で、明らかに他者からの暴力を受けたように見えるケース（「誘拐」的事例、事例11）でも、彼女たちがその痛みを訴えることはない（訴えは書き込まれていない）。結局のところ、彼女たちはかなり刹那的、幾分か不条理に振る舞う、何を考えている・感じているのかよくわからない人たちというふうに見えざるをえない。（実際それが近年の村人たちの感覚でもあるというのだが）。まさにそれは、センシユアルながらセンシブルならざる存在、ほぼ教科書的にエキゾチックな「他者としての女性」像なのである。

今時のラフ女性たちは、本当に「わからない」、不条理な存在なのだろうか。そうではあるまい。もしそう見えるなら、それは彼女たちをめぐる書き込まれるべきことが十分に書き込まれていないからである。書かれるべきは何かといえば、月並みな言

い方にはなるけれども、彼女たちの振る舞いの背景をなす構造、マクロ／ミクロな、客観／主観的な社会・文化・経済的諸背景ということになる。マクロな文脈としてグローバル・ハイパガミー、よりローカルな文脈としてラフの人格構造、ジェンダー構造のほか、市場経済／消費主義とラフ社会・経済・文化の接合や、異民族（特に漢族）との関係性のありようなどがすぐに思い浮かぶ。ほぼ手つかずの後二点は今後の研究の進展に期待し、ここではジェンダー構造について二三、指摘しておく。

既に見たように、著者はラフが「男女平等」であるという。双系の親族ネットワークに依拠するそのありようは確かに相対的に平等かもしれない。しかし、記述のここから見え隠れするのは、決して平等とは言いきれない男女の諸相である。生家に残るのは男子が望ましく、土地は基本息子たちが均分相続、家神の祭壇には男性家長が線香を点し、妻へのDVは珍しくないように、村を統べる「山神」に女性は接近してはならず、村唯一の伝統的専門職であるらしい呪医モーパは男性（そう明言はないが写真や代名詞使用から推定される）ともなれば、これをジェンダー平等社会とまとめるのは無理があろう。本書の核心である

移動に関していえば、もとよりラフ社会になかったかたちの著しいジェンダー間不均衡（例えばそこで女性は金と交換に男性に受け渡される）において遂行されているものであり、またその結果として漢族ジェンダー秩序にラフ女性を組み込んでいくものでもある。もし男女平等を生きてきたラフ女性なのであれば、なぜこの移動で、あるいは移動した先で遭遇する、ときに暴力的ですらありうるジェンダー不均衡をこともなげに受容するのだろうか？ それに遭遇してもなぜ突き進むのだろうか？ 対等な男女関係はラフ女性にとって重要ではないのか？ 彼女たちが抱いているという漢族男性に仮託された外の世界へのほんやりした憧れだけから、実際に生きてきた社会性・関係性を切断するその跳躍を理解するのは難しい。むしろ、彼女たちが生きてきた社会性・関係性にこそ育まれた「出たい」「行きたい」があったはずなのである。

新進気鋭の著者だからこそできた濃やかな女性同士の交流を通して、この世界の片隅に生きる女性の生の一端を照らしだす本書の関心は、評者自身が追ってきたところにも大きく重なっており、今後の展開・深化に大いに期待する。その期待を繋いでくれる、好著である。

(掲載決定日：2019年5月29日)